

音楽科教育の現場におけるピアノ伴奏に対する認識

斎藤 完・岡崎 美夏*

Recognition of Piano Accompaniment in School Music Education

SAITO Mitsuru, OKAZAKI Mika*

(Received January 11, 2011)

キーワード：音楽科教育、ピアノ伴奏

はじめに

伴奏者に必要とされている技術と、独奏者のそれとは統合では結ばれない¹。

島川香織 (2008) が指摘するように、伴奏では独奏には求められない表現が必要とされるからである。

歌唱曲の伴奏付けとは、あらかじめ作られている歌詞の内容やメロディーを知覚・感受し、その知覚・感受された内容を通して、作詞・作曲者の意図や音楽的感性を汲み取り、それらを基にしてイメージを膨らませ、立体的な形式としての和声を軸として、創作的な表現をおこなうことである (193)。

これが教育目的となると、さらに複雑になるのは言うまでもないだろう。たんに伴奏付きの歌唱体験で音楽理解を促すだけでなく、伴奏を通じて (あるいは伴奏に加えて) 音楽表現の教授までおこなうからである。

まず、その複雑さ、ないし困難さは身体的な制約となって現われる。

実際にピアノの伴奏をしながら指導を行なおうとすると、鍵盤の位置が頭の位置よりも低いために、どうしても視線が下の方向へいくことになり、他者の反応を見るというのは、ある種の技術と経験が必要になる。しかも、楽譜を見なければならぬ場合、譜面台の位置も影響されてしまう。つまり、音楽授業の伴奏としてピアノを弾くためには、楽譜に記されている音を理解できる状態と実際に音を出すために鍵盤に置き動く手の位置、そして授業の様子、つまり生徒たちの反応を適切に把握できる視野の広さや心のゆとりをすべて備えていなければ実践することは難しい (鈴木賢太 2001 : 167)。

こうした状況下、伴奏者 (=教育者) には「歌声、表情、アイ・コンタクト、言葉やし

*山口大学教育学研究科音楽教育専修

ぐさによる働きかけ」が要求され、まさに尾見敦子が言うように、伴奏は歌唱指導場面における「パフォーマンス全体の視点から追求すべき」行為となる(390)。そして「パフォーマンス」とともに、伴奏は「正しい拍子やリズム表現、曲想にあった速度や強弱表現の支えとなり、音楽的な雰囲気(和声的な安定効果、描写的な背景効果、その他の美的な感興効果など)をいっそう高め」といったことも期待されていると言えよう(紙屋信義 後藤みゆき 2008: 73)²。

伴奏技術は、教員養成系の大学において通常、「ピアノ伴奏法」などといった名目の科目を履修して学習することになっている。だが、管見では教員養成を目的とする大学であっても、ピアノ関連科目の主は独奏法の教授であり、伴奏法ではないようだ。本学に関して言えば、伴奏法を学習するのは二年次の後期のみである。

果たして、大学における伴奏法の教育は十分なのだろうか。

中島卓郎らの研究(2005)からは、伴奏を教育することの意義とともに、数ヶ月間では伴奏技術のすべてを習得できないことが伺える。信州大学教育学部音楽教育分野の二年次生18人を対象にした、「授業実践的伴奏能力の育成」を図る授業において、「半数あるいはそれ以上の学生に進歩が見られた」一方で、多くの課題を残しているのである。具体的に問題視されているのは、「主要パートへの合図が適切にできる」「伴奏を弾きながら生徒の様子を見ることができる」「曲想にふさわしい口調で指示をおくことができる」「曲想にふさわしい表情(顔)で指示をおくことができる」「前奏や間奏あるいは伴奏におけるピアノパートの重要なパッセージなど意識して表現することができる」などといった能力だ³。さらに指導内容を見る限り、和声学的な知識を用いた学生独自の伴奏付けに関する指導はおこなっていないようなので、問題はさらに深刻なのは明らかであろう。

こうしたことから、音楽科教育の現場では伴奏に関して混乱があることが想定されるのだが、現状はいかなるものであろうか。前出の鈴木は「なれば大丈夫」としているが、それでは慣れるまでの試行錯誤に問題は存在しないのか。いわんや初等科教育の現場である。音楽的な専門教育をほとんど受けていない教員たちはどのように伴奏に取り組んでいるのか。CDの使用が一般的であると伝え聞くが、ピアノ伴奏のスキルアップに対する要望はないのか。

本稿は、以上で述べた問題意識のもと、音楽科教育の現場での伴奏をめぐる現状を把握しようとするものである。

その把握に際して、雑誌『教育音楽』における過去10年間(2000年～2009年)の伴奏に関する記事を調査した。音楽科教育の専門誌に、現場の現状が反映されていると考えたからである。

本稿の構成ならびに執筆担当者は以下のとおりである。

「はじめに」：斎藤担当。

「1. 雑誌『教育音楽』について」：岡崎担当。

同誌の歴史的経緯を簡単に振り返り、近年の目次のあり方から雑誌の概要を説明する。

「2. 『教育音楽』におけるピアノ伴奏に関する記事」：岡崎担当。

このセクションは「(1)『教育音楽 小学版』」と「(2)『教育音楽 中学・高校版』」に分けて、ピアノ伴奏に関する記事を調査した結果を明らかにしている。

「おわりに」：斎藤担当。

同誌への取材を踏まえ、調査結果を検討している。

「付録」：岡崎担当。

雑誌『教育音楽』における過去10年間（2000年～2009年）の伴奏に関する記事。

1. 雑誌『教育音楽』について

雑誌『教育音楽』は、教育音楽家協会⁴の編集、日本音楽雑誌株式会社⁵の発行によって1946年12月に創刊された。月刊となったのは翌年の1947年の6月号からであり、1957年4月号から『教育音楽 小学版』と『教育音楽 中学版』の二誌となって発行されている。『教育音楽 中学版』が現在の名称である『教育音楽 中学・高校版』となったのは、1981年4月号からである。現在、発行部数はそれぞれ35000部となっている⁶。

管（1999）は、創刊当時の『教育音楽』について「創刊当時から教材の解説と指導の展開例を示した『教材解説』をシリーズ化している。執筆者には現場の教師たちも加わっており、当時の実践の動向を伺い知ることができる（p.120）」と論じている。また、同時代に存在していた「日本音楽教育連盟」が発行した『音楽手帖』は1950年で休刊となっているのに対し、『教育音楽』はその後も継続し続けていることから、管は「現場への現実的な影響力も強かったと考えられる（p.120）」と述べている。

2007年と2008年の目次を見てみると、一貫して「特集、カラーページ、グラビア、連載、音楽科実践事例、教音ジャーナル」と分類されており、ここから最近の『教育音楽』のあり方をみてとることができる。

特集は、授業で役に立つという主旨で組まれているようだ。「この言葉で子どもが変わる！ ヤル気を育てる指導言」や「生徒が伸びる効果的な『ほめ方』」などである。毎号、表紙の中央に大きく特集名が記載され、雑誌の核になっていることがわかる。特集の形式は、授業のレポートやインタビュー、教師や大学教授などが執筆している記事など様々である。

カラーページは、『教育音楽 小学版』『教育音楽 中学・高校版』に共通した内容となっている。ここでは、学校教育から離れて舞台や催し物が取上げられている。

グラビアでは、インタビュー記事と取材記事がある。インタビュー記事は、『教育音楽 小学版』『教育音楽 中学・高校版』に共通の記事が記載されている。取材記事には、授業の取材と、学校教育を離れた催し物の取材との二種類がある。前者は、二誌それぞれ別の内容であるが、後者に関しては一部共通の記事が見られることもあった。

連載は、それぞれ見開き2ページで記載されている。『教育音楽 小学版』では、毎号10～12本の連載があり、2年間では合計19本もの連載があった。『教育音楽 中学・高校版』では、毎号8～9本の連載がみられ、2年間で記載された連載は12本であった。内容としては、歌唱指導、器楽指導、鑑賞指導、そして創作などといった授業で役立つ内容もあれば、授業に限定されない合唱指導の連載もみられた。

音楽実践事例は、『教育音楽 小学版』『教育音楽 中学・高校版』ともに各学年の実践事例が載せられている。現場の教師の執筆によるもので、4カ月単位の連載になっている。

教音ジャーナルは20ページ弱からなり、毎号かならず巻末にまとめられている。他の記事や連載と区別され、雑誌の巻末が教音ジャーナルの頭になるように編集されている。ここでは、情報提供のような形になっており、催し物、商品、ソフト、図書、楽譜の紹介が

されている。また、学校紹介と全日音研ニュースと日本教育音楽協会ニュースも取上げられている。

また、号によっては、コンクールの記事が加わることがある。NHK全国学校音楽コンクール、全日本合唱コンクール、全国学校合奏コンクールのことが取上げられている。日本教育音楽協会の事業の一つに、NHK全国学校音楽コンクールや全国学校合奏コンクールの主催があるということが関係しているようだ。コンクールの記事の内容としては、コンクール後の講評とNHK全国合唱コンクールの課題曲に関する特集である。

以上から、雑誌の核になっていると思われる特集や連載において、授業における音楽の内容が取上げられていることがわかる。雑誌の表紙に「授業・行事・課外活動・社会教育にすぐ役立つ！」とあるように、学校外の情報提供も行われているが、本誌において中心となる内容は、やはり授業における音楽であるようだ。

2. 『教育音楽』におけるピアノ伴奏に関する記事

上記のように、長期間にわたって一貫して教育現場に密着した話題を取り上げている雑誌において、ピアノ伴奏に関する記事はどのように扱われてきたのだろうか。

調査した範囲は、『教育音楽 小学版』『教育音楽 中学・高校版』ともに2000年1月号から2009年9月号である。なお、記事の一覧は巻末に付録している。

2-1 『教育音楽 小学版』

同誌ではNHK全国学校音楽コンクールに関する「演奏者へのアドバイス」という特集がほぼ毎年組まれており、伴奏はその枠内で記述されることが最も頻度が高い⁷。その内容は指揮者・作曲家・作詞者から示されるピアノ伴奏の仕方への助言である。具体的には次のように記されている。

ピアノ伴奏についても少しアドバイスを申し上げます。前奏の2小節は、楽譜にあるpの表記と2小節にわたるスラー、クレシェンドとディミヌエンドを頭に入れて、3小節目からの軽快なリズム感のためにも、決して遅くならないように注意しながら、神秘的に弾き始めてください。

3小節目以降は、左手のリズムだけでまず、この曲全体の雰囲気をしっかり和掴んでください。左手だけで十分にコーラスを支えられるようにしておくと、右手のリズムが軽快に、素敵に響きます！（2008年5月号 p.41）

このように助言は、強弱やテンポやリズム感や曲の雰囲気など様々なことについて具体的に言及しているのだが、前奏や間奏等のピアノだけの部分を中心となっている。

いずれにしても特集記事では合唱に対する助言が主となっており、伴奏への助言は多い年でも、全体の10分の1に満たない。

伴奏に関する記事は、実践や教師自身のこだわりを掲載するページにもみられるのだが、ここでも記述は少ない。例えば「授業を生き生き 音楽科指導事例 音楽の授業で、何を教える？何を学ぶ？」（2008年7月号）では、第3学年のリコーダー指導の実践事例の中

で次の様に記されている。

曲のまとめでは、ピアノ伴奏でテンポや表情を変えながら、また、教師が様々な歌詞で歌いながら、何度もリピートして演奏させると、飽きずに楽しめ、いつの間にか、表現力がついてきます。(p.74)

あるいは「特集“うたごころ”はどう育てる？」における次のような記述である。

また、合唱の伴奏を担当するピアニストの場合も同様です。ピアノ譜どおりに忠実に弾いているのですが、とても歌いにくいことがあります。ピアニストによって、合唱団の表現力に大きな影響が及ぶため、ピアニストだっとうたごころは必要なのです。(2001年1月号 p.51)

上記二例のように記述が少量であるばかりでなく、具体性に乏しいのが特徴的である⁸。

以上のように、『教育音楽 小学版』では、合唱コンクールにおける伴奏に焦点をあてた記事などが散見されるものの、全体的にはあまり省みられることはなく、とくに授業の中でのあり方については皆無に近いといえることができるだろう⁹。

2-2 『教育音楽 中学・高校版』

『教育音楽 中学・高校版』でも『教育音楽 小学校版』と同様に、NHK全国学校音楽コンクールの課題曲へのアドバイスの記事において、やはり少量ではあるが、ピアノ伴奏に関する記述がみられる¹⁰。

17小節のピアノのsfはかなり強調して。そのあとの18小節から19小節のピアノはクレッシェンドをかけ、19小節の2つの音はかたく弾いて、コーラスの「ぜんぜん」を引き出しましょう。音楽を収めないで。(2001年5月号 p.90)

このように助言は曲中のある一部分に関しては、具体的に記されている。しかしながら小学校版と同様に、あくまで合唱に対する助言が主であり、ピアノ伴奏に対する記述は少量である。

また、2006年から2008年までの連載コーナー「うまくなろう！ 合唱 作曲者からのアドバイス」でも、ピアノ伴奏の具体的奏法に関する記述がある。これは毎月合唱曲を1曲取り上げ、作曲者がその曲についてアドバイスをするというものである。

Piu mossoのピアノの入りは、わざとらしくテンポを切り替えず、アカペラで表現されたやわらかさを感じ取り汲み取りながらのテンポ感、音色感が欲しいです。

次のピアノの間奏は、そこまで作ってくれた柔らかく温かく瑞々しい感動を受け継ぐ形で弾かなければなりません。一つ一つの音が柔らかく打鍵されながら、かつ冒頭のアカペラ・コーラスのように8分音符が露骨に見えないようなレガートで弾きましょう。(2008年2月号 pp.56-57)

上記の例は、谷川俊太郎作詞・高嶋みどり作曲による《魂のいちばんおいしいところ》（混声3部合唱）に対する、作曲者からのアドヴァイスである。このように伴奏に関する助言が少しでも掲載されている号もあれば、ピアノ伴奏に全く触れられていない号もあり、執筆者（作曲者）によって差が出ている。

こうした中、わずかではあるが実践事例や「授業のこだわり」などの記事で、ピアノ伴奏を工夫した事例やピアノ伴奏へのこだわりが記載されている。例えば、2005年9月号の「授業を生き生き 音楽科指導事例」において、「なかなかタイミング通りに音を出せない子どもに対して、演奏部分をその時々に合わせて繰り返したりゆっくりにしたりと伴奏のほうで工夫しました(p.70)」や、2001年2月号の「これだけは変えない!!『音楽授業』私のこだわり」における「自分の声で、自分の弾くピアノで生み出した生の音楽を生徒たちと共有することを大切にしています(p.63)」という記述である。

また、合唱に関する用語を説明している連載コーナー「合唱おもしろカタログ」で、「伴奏」の項目がある。

ただひたすら、合唱に対しての和声的補助のみのピアノ——最近の合唱曲には、こんなのはまず無いが——ならまだしも、ピアニストは合唱と対等、またはそれ以上の場合もあるのだ。(2002年 11月号 p.87)

『教育音楽 中学・高校版』では、合唱の伴奏に関する記述がほとんどである。内容もその大半が具体的な曲に関する具体的な奏法と言ってよいだろう。ピアノ伴奏の役割やピアノ伴奏に必要とされるものなどを記している記事も一つみられたが、見開きページの8分の1程度の量である。中学校では、クラスで合唱に取り組むようになり、歌唱教材とは別に合唱曲に取り組む機会が増える。『教育音楽 小学版』と比べて、合唱記事の割合が大きいのもそのためであろう。

以上のように『教育音楽』において伴奏は、合唱での具体的な奏法、あるいは実践での「こだわり」や工夫として言及されることが多いようであるが、いずれも少量である。また、ピアノ伴奏が特集として取上げられることは一度もなく、連載記事にしても、ある連載の一部には見られたが、ピアノ伴奏そのものに関する連載はみられなかった¹¹。

おわりに

上記の調査結果を音楽科教育の現場の反映と捉えるのであれば、伴奏はその現場において大きな問題としては認識されていないという結論になるだろう。

この結論は妥当なものか。

以下、音楽之友社『教育音楽』編集部への聞き取り調査¹²をもとに、結論の妥当性を検討したい。

その妥当性は記事の決定のされ方を知ることで把握されよう。換言すると、同誌がどのようにして読者（現場教員）のニーズを捉えているかを検討することで、記事調査の結果が現場の声を反映したものであるか否かが推察されるのである。

まず、『教育音楽』の掲載内容は、現場への取材や寄稿者との話し合いなどによって決め

られることが多いようだ。対象となる取材現場や寄稿者は、同誌がもっているネットワークを情報源にして選び出されている。ネットワークには一般の教員をはじめ、指導主事などの専門的職員、大学教員などの教育者／研究者、さらには音楽家など、音楽教育を網羅するに十分な人材で構成されている。過去60年以上にわたって、ほぼ唯一の専門誌であった実績を省みれば、そのネットワークの質・量を改めて問う必要はないだろう。

また、全日本音楽教育研究会、ならびに各レベル（市町村／都道府県／ブロック）の音楽教育に関する研究会、さらには日本音楽教育学会や日本学校音楽教育実践学会などの大会、その他さまざまな講習会やセミナーに参加することによって、音楽科教育の動向や「現場の悩み」の把握に努めているとのことだ。付言すると、「現場の悩み」に関しては、直接的にその声を拾い上げる方策として、「読者ページ」などを企画したり、投稿を募ったりもしたが、その成果は芳しいものではなかったらしい。

60年以上の人的蓄積（ネットワーク）の存在と、研究会／学会／講習会などへの積極的な参加。これらを勘案すると、『教育音楽』の記事には現場の声が色濃く反映されていると言うことができるだろう。販売部数の増減によってそのニーズが検証されていることも見逃せない。

以上から、先に示した仮の結論——伴奏は音楽科教育の現場において大きな問題としては認識されていない——の妥当性は認められよう。

本研究が対象とした期間（2000-2009）には、教育現場における伴奏に関する紀要論文が約30本発表されているのとは対照的な結果となった。

結局のところ、充実したピアノ伴奏を追求するのは大学で描かれる理想に過ぎないのだろうか。

謝辞

音楽之友社『教育音楽』誌編集長・岸田雅子氏にはご多忙中にも関わりませず、聞き取り調査へのご協力を賜りました。また同社の藤川高志氏には岸田氏への橋渡しをしていただきました。お二方に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

補足

¹音楽科教育の現場での現状を念頭におき、本稿において伴奏とは歌唱活動におけるピアノ伴奏に限定している。

²この段落で引用した二つの論文は、保育あるいは幼児教育における関するものであるが、教育現場での伴奏一般にも通ずることであるので、本稿の一部に採用した。

³これらに加えて、「伴奏を弾きながらテンポの変化の指示を口頭や身体で適切に与えることができる」「伴奏を弾きながら音楽的表現の指示を適切に与えることができる」についても、約半数が苦手意識を持っていることが「表2 自己評価の内容と個人別にみた結果の傾向」から読み取れる。

⁴教育音楽家協会は、1945年12月に結成した。現在の日本教育音楽協会の前身である。

⁵日本音楽雑誌株式会社は音楽之友社の前身である。

⁶音楽之友社『教育音楽』編集部への取材（2010年7月16日）による。

⁷記述が見られたのは、2000年5月号、2001年5月号、2005年5月号、2006年5月号、2008年5月号であった。

⁸逆に音楽の授業でピアノを弾かずにCDを使うことの利点を述べるものもある。

河原木は、音楽の授業で、ピアノを弾きません。歌って教えることもありません。いつも、指導書付属のCDを使っています。

ピアノを弾いていると、教室を歩き回れないでしょう？（弾きながらピアノを持ち運べるというなら別ですが）

CDを使えば、子どもたちの中に入って、一人ひとりの声を聴いたり、表情を見たりすることができる。（2007年4月号 p. 30）

⁹こうしたなか、ピアノ伴奏に焦点を当てた記事も——わずかながらではあるが——ある。2008年9月号の「さとあき in the pocket 授業に使えるあんな手・こんな手」という連載記事では、ピアノが弾けることの利点として、速さを変えられる、強弱を変えられる、移調が自由にできる、音の高さを変えられる、曲想を変えられる、伴奏を変えられるということが2ページにわたって挙げられている。

また、2007年8月号から10月号にわたる合唱指導の連載では伴奏についての記述が充実している。

賛美歌を歌う際にオルガンで声部をなぞりながら演奏するような場面、ここではオルガンは読んで字のごとく（歌に伴い奏され）ます。これに対しシューベルトやシューマンらの歌曲におけるピアノパートは、単1声部である歌に和声を補強するのみならず、ある時は情景を、ある時は心情を表現し、声楽と一体となって音楽をつくり上げます。すなわち主声部である声楽ともに奏で（共奏）、主声部と協力し（協奏）、主声部に伴うのではなく、主声部と競い合う（競奏）、という関係にあるとあってよいでしょう。伴奏付き児童合唱におけるピアノパートの多くは、賛美歌におけるオルガンではなく、歌曲におけるピアノパートと同じ意味をもっていると考えるとよいのではないのでしょうか。（2007年8月号 p. 40）

この他にも教師が伴奏をする時には指揮者であり伴奏者でもあるということ意識する必要性が述べられ、子どもの歌の練習段階に応じて即興的に伴奏をつけていくことも譜例を挙げて言及されている。

¹⁰記述がみられたのは、2000年5月号、2001年5月号・6月号、2003年6月号、2004年6月号、2006年6月号、2007年5月号、2008年5月号、2009年6月号である。

¹¹なお、音楽之友社発行の雑誌『ムジカノーヴァ』におけるピアノ伴奏に関する記事についても調査した。調査範囲は、1992年1月号から2003年12月号の10年間である。

10年間でピアノに関する記事がみられたのは、1998年11月号と1999年4月号の2冊だけであった。しかし、どちらもピアノ伴奏に焦点を当てた特集が組まれており内容も充実している。内容としては、プロのピアニストの伴奏経験が語られている記事や、歌手の視点での伴奏が記述されている記事もあった。そのほかには、評論家による批評や推奨されるピアニストやCDの紹介がされている記事がみられた。

¹²2010年7月16日午後12時30分～午後1時30分、音楽之友社会議室にて。『教育音楽』編集長・岸田雅子氏からの聞き取り調査。

引用・参考文献

浅井一郎（2001）：これだけは変えない！『音楽授業』私のこだわり，教育音楽 中学・高校版，530，63-64.

大島節子（2005）：音楽科指導事例 授業を生き生き 養護学級・学校 子どもたちとの表現を楽しむ，教育音楽 中学・高校版，585，70-71.

尾見敦子（2003）：幼児のための歌唱伴奏法：その指導法の研究，日本保育学会大会研究論文集，16，390-391.

紙屋信義、後藤みゆき（2008）：ピアノによる子どもの歌伴奏の効果：アレンジによる伴奏法を考える，東京未来大学研究紀要，1，67-75.

河原木孝浩（2007）：特集 1学期の授業づくり（低学年）この一年間が天国となるか、地獄となるか！？出会いの一時間で決まる低学年の音楽授業，教育音楽 小学版，724，30-31.

管道子（1999）：戦後改革期における音楽科の学習構成の展開—雑誌『教育音楽』内容分析を中心として—，教育方法学研究，25，119-127.

佐藤明子（2008）：連載 さとあき in the pocket 授業に使えるあんな手・こんな手 其

- の6 芸は身を助ける, 教育音楽 小学版, 740, 44-45.
- 島川香織 (2008) : ディスカッションによる歌唱曲の伴奏付けの学習過程を通じた創作的表現における『形成』のメカニズム, 学校音楽教育研究, 12, 193-204.
- 清水敬一 (2001) : 平成13年度(第68回)NHK全国学校音楽コンクール[中学校の部]課題曲変奏へのアドヴァイス 演奏のポイント, 教育音楽 中学・高校版, 533, 89-91.
- 鈴木賢太 (2001) : 学校教育の音楽授業における伴奏法, 新潟大学教育人間科学部紀要 人文・社会科学編, 5, 167-174.
- 高嶋みどり (2008) : うまくなろう! 合唱 作曲家からのアドヴァイス, 教育音楽 中学・高校版, 614, 56-57.
- 武田雅博 (2002) : 若きコーラスシンガーのための合唱おもしろカタログ, 教育音楽 中学・高校版, 551, 86-87.
- 玉城智子 (2008) : 音楽科指導事例 授業を生き生き 第3学年 音楽の授業で、何を教える?何を学ぶ?, 教育音楽 小学版, 739, 74-75.
- 辻秀幸 (2008) : 第75回(平成20年度)NHK全国学校音楽コンクール『小学校の部』課題曲演奏へのアドヴァイス『演奏・指導のポイント』『この☆』の未来は我々に託されている, 教育音楽 小学版, 737, 40-41.
- 富澤裕 (2007) : その言葉どういう意味? あまのじゃく合唱指導のヒント, 教育音楽 小学版, 728, 40-41.
- 中島卓郎、渡辺亜希子 (2005) : 教員養成教育におけるピアノ伴奏法に関する指導内容と方法——授業実践的伴奏能力の育成へ向けて——, 学校音楽教育研究, 9, 110-111.
- 橋本俊彦 (2001) 特集 “うたごころ”はどう育てる? 技能ではなく、意欲と感動を!, 教育音楽 小学版, 649, 50-51.
- 『教育音楽 小学版』音楽之友社 2000年1月号～2009年12月号(計118冊)
- 『教育音楽 中学・高校版』音楽之友社 2000年1月号～2009年12月号(計113冊)

付録

紙幅の関係上、特集名などを短く編集している場合もある。また、「頁」では記事の開始ページを記載している。

小学版				
年	月	特集名	頁	内容・特徴
09	11	めざせ! 授業の達人!! 第8回	60	簡易伴奏では物足りず伴奏譜を作り直し
09	10	教室ですぐに役立つ! 鍵ハモ講座第22回	52	鍵盤ハーモニカを吹きやすいように伴奏
09	4	題材作り 工夫とアイデア	33	伴奏の違いで子どもたちの感じ方は違う
08	10	特集●歌唱教材管理法Ⅱ	36	伴奏とのかかわりから曲の山作り
08	9	さとあき in the pocket 其の6	44	ピアノ伴奏の利点など
08	7	授業を生き生き 音楽科指導事例	74	曲のまとめに伴奏で速度や表情を変える
08	5	NHK全国学校音楽コンクール	41	具体的な奏法
08	3	ピアノが苦手でも授業はうまくいく!	56	日本の歌曲を味わおう!
08	2	ピアノが苦手でも授業はうまくいく!	56	長調・短調の音楽

08	1	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	重なり合う響きの美しさを味わおう！
		お手軽〇〇術 (連載)	46	だれでもできる簡易伴奏づくり
07	12	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	曲想はどこに!?～6年生鑑賞教材
07	11	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	—
07	10	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	学び合う関係をつくる (2)
		(連載) あまのじゃくの合唱指導のヒント	40	伴奏 その3
07	9	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	—
		(連載) あまのじゃくの合唱指導のヒント	—	伴奏 その2
07	8	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	楽しく学ぶ基礎・基本～歌唱力が付く！
		(連載) あまのじゃくの合唱指導のヒント	40	伴奏
07	7	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	楽しく学ぶ基礎・基本～歌唱力が付く！
07	6	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	速効・鑑賞授業の技術《基本編5》
07	5	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	速効・鑑賞授業の技術《基本編4》
07	4	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	速効・鑑賞授業の技術《基本編3》
		特集 1学期の授業づくり	30	ピアノを弾かない理由
07	3	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	速効・鑑賞授業の技術《基本編2》
07	2	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	速効・鑑賞授業の技術《基本編》
		先生だって欲しい！デジモノ！	40	伴奏は機械に任せ子どもと一緒に歌おう
07	1	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	メジャーとマイナーを歌い分ける！
06	12	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	50	メイジャーコードの曲が” 暗い ” なんて!?
06	11	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	何をいまさら《ブラスト!》なんて!?
06	10	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	—
06	9	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	48	曲の構成や楽器の音色をとらえて聴く
06	8	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	48	表現力をつける
06	7	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	《ことば・動き・音》をキーワードに！
06	6	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	56	『越天楽今様』～構内研究授業から (2)
06	5	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	58	『越天楽今様』～構内研究授業から (1)
		NHK全国学校音楽コンクール	40	具体的な奏法
06	4	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	62	鑑賞力を育てる～行進曲から学ぶもの
06	3	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	大学生が参観した授業から
06	2	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	DVD《ベルリンフィルと子どもたち》
06	1	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	Bobbyは最高!!～Jazzの魅力
05	12	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	「義太夫節・文楽」が教材に《その3》
05	11	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	64	「義太夫節・文楽」が教材に！《その2》
05	10	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	64	「義太夫節・文楽」が教材に！《その1》
05	9	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	教え合い・学び合う場を子どもたちに
05	8	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	64	《コロンバ・ブッシュさん来校～続編》
05	7	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	ファースト・レディの授業参観！
05	6	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	歌声に挑む
05	5	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	小さな狂言師への共感～狂言『靉猿』
		NHK全国学校音楽コンクール	45	具体的な奏法
05	4	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	テレビ番組《にほんごであそぼ》から
05	3	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	音楽表現・工夫へのヒント4
05	2	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	音楽表現・工夫へのヒント3
05	1	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	音楽表現・工夫へのヒント

04	12	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	音楽表現・工夫へのヒント
04	11	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	64	DVDだから効果的にできる教材化！
04	10	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	62	範唱CD活用術（4）
04	9	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	—
04	8	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	64	範唱CD活用術（2）
04	7	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	66	範唱CD活用術（1）
04	6	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	68	DVD活用法（3）
04	5	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	68	DVD活用法（2）
04	4	ピアノが苦手でも授業はうまくいく！	—	DVD活用法（1）
01	8	NHK課題曲講習会から	28	奏法指導の様子
01	5	NHK全国学校音楽コンクール	66	具体的な奏法
01	1	”うたごころ”はどう育てる？	51	伴奏にもうたごころ
00	5	NHK全国学校音楽コンクール	70	具体的な奏法

中学・高校版				
09	11	どんどん歌おう！楽しいポップス	44	コードネームによって簡易伴奏
09	10	言っているの？授業の本音！ 第43回	51	コード奏法で合わせる（記述のみ）
09	6	NHK全国学校音楽コンクール	48	具体的な奏法
08	11	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
08	9	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	58	具体的な奏法
08	8	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
08	1	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
07	7	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	60	具体的な奏法
07	11	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	54	具体的な奏法
07	9	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	54	具体的な奏法
07	5	NHK全国学校音楽コンクール	47	具体的な奏法
		うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	58	具体的な奏法
06	11	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
06	7	うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
06	6	NHK全国学校音楽コンクール	48	具体的な奏法
		うまくなろう合唱 作曲家からのアドバイス	56	具体的な奏法
05	9	授業を生き生き 音楽科指導事例	70	伴奏を工夫した事例（少しだけ）
04	6	NHK全国学校音楽コンクール	49	具体的な奏法
03	6	NHK全国学校音楽コンクール	67	具体的な奏法
02	11	合唱おもしろカタログ	86	伴奏とは
01	6	NHK全国学校音楽コンクール	74	具体的な奏法
01	5	NHK全国学校音楽コンクール	88	具体的な奏法
01	2	「音楽授業」私のこだわり	63	生のピアノ伴奏へのこだわり
00	5	NHK全国学校音楽コンクール	70	具体的な奏法